

# 皇太子／昭和天皇裕仁の野球観戦

— 1922～30年 —

坂上 康博

## はじめに

1912年（明治45）5月10日付『読売新聞』は、「野球競技台覧」という見出しで、皇太子嘉仁（後の大正天皇）について、

殿下には近時野球競技が我邦学生界の一大勢力なるを認めさせられ来る廿七日早稲田大学運動場へ行啓、親しく同大学野球部選手の競技を御覧遊ばさるゝやに洩れ承る、之に就き同大学にては非常なる光栄を感じ新たに制服を調製し選手を紅白二組に分ち各自をして充分に同競技の精神を發揮せしむることとなせり

と報じた。慶応大学とともに当時学生野球界の双璧をなし、前年には2度目のアメリカ遠征を行なった早稲田大学の野球部員たちによる野球を5月27日に観戦するというのだ。

しかし、この野球観戦は実現しなかった。皇太子嘉仁は、この日の午後、東京築地の水交社で、裕仁（のちの昭和天皇）、雍仁（秩父宮）、宣仁（高松宮）の3人の子どもといっしょに野球ではなく、海軍記念日の余興相撲、太刀山と西ノ海の取り組みなど30番余りを3時間近くにわたり観戦した<sup>1)</sup>。ちなみに子どもたち3人は、その8日前、5月19日にも、国技館で太刀山と千年川の取り組みなど計29番を5時間余りかけて観戦している<sup>2)</sup>。相撲好きの子どもたちの嗜好に合わせて、野球観戦の予定を相撲に変更したということだろうか。

真相は不明だが、当時明治天皇の要望を受けて、裕仁の教育のために学習院の院長に就任していた乃木希典が、強固な野球否定論者であったことを考えると、皇太子嘉仁の野球観戦が実現した可能性はそもそも低かったとみるべきではないだろうか。乃木は、「此の頃野球をするから学生の目付まで変り居る。アノ様なものをさせてはいかぬ」と

主張し<sup>3)</sup>、野球の対校試合を問題視し、『東京朝日新聞』が前年に展開した野球害毒キャンペーンでも、その一翼を担った<sup>4)</sup>。こうした乃木の主張に抗って、皇太子嘉仁の野球観戦企画が宮中で合意を得られたとは思えない<sup>5)</sup>。おそらく海軍記念日の相撲観戦はすでに確定しており、それとは重ならないよう午前中などに野球観戦をするという企画を側近の誰かが思いつき、それが『読売新聞』に漏れ伝わったが、企画段階で潰え去ったということではないだろうか。

天皇家による野球観戦の実現は、それから11年後の1922年、皇太子となった裕仁による和歌山中学の現役対OB戦を待たねばならない。裕仁は、その後、26年には東京六大学野球の選抜選手による紅白戦、29年には早稲田対慶応戦、そして30年には静岡中学対静岡商業戦を観戦する。戦前における皇太子／昭和天皇裕仁の野球観戦はこの計4回であり<sup>6)</sup>、最初の2回は皇太子時代、あとの2回は天皇即位後であるが、8年間という限られた時期に集中している。

皇太子時代の2回の野球観戦については、これまでも拙書などで取り上げてきたが、それは裕仁による西洋スポーツへのアクセスという面をクローズアップしたものであり、相撲などの伝統スポーツについては目を向けてこなかった<sup>7)</sup>。本稿では、第1にこの点を補充し、皇室によるスポーツ奨励の全容にせまってみることにしたい。

第2に、野球観戦の場において、皇太子／昭和天皇裕仁の権威がいかん表現され、また人々に受容されていったのかという問題について若干の検討を試みてみたい。

坂本孝次郎は、J・ハックスレイとH・D・ダンカンに依拠しながら、「社会的な隔たりを乗り越えるための働きかけを前提とした、タテ関係の相互の表現行動および行動儀礼」をコートシップと定

義し、その展開とその関係様式の規制や関係距離の管理こそが象徴天皇制をめぐる政治を構成すると述べている<sup>9)</sup>が、この指摘は皇太子／昭和天皇裕仁の野球観戦場面の分析にも重要な示唆を与えてくれる。

本稿では、理論面では坂本のコートシップ論を手がかりにしながらか検討を試みるとともに、実証面ではとくにその場にいた観衆や生徒たちの内面にせまってみることにしたい。皇太子／昭和天皇裕仁の行幸啓については、近年、原武史の研究によって、それが君民一体の「国体」を可視化するものであったという重要な事実が明らかにされてきている<sup>9)</sup>が、それが人々にどのような影響を与えたのかという問題を追究するためには、個別ケースについての実証的な検討の積み重ねが必要だと思われる。

## 1. 1922年の和歌山中学野球部現役対OB戦

### 1) 初の野球観戦

1922(大正11)年11月20日、皇太子裕仁は、摂政として香川県下特別大演習を統監した後、南海道方面を視察し、12月1日には和歌山を訪れた。翌2日、裕仁は和歌山中学を行啓し、ここではじめて野球を観戦する。『昭和天皇実録』の記述の全文を引いておこう<sup>10)</sup>。

午前十一時五十五分、県立和歌山中学校に行啓される。校長奥源次より学校要覧の奉呈を受けられ、授業を御覧になる。引き続き運動場において中等学校選手によるリレーレースを御覧になる。御昼餐後、再び運動場にお出ましになり、同校野球部の在校生と卒業生による試合を御覧になる。和歌山中学校野球部は、全国中等学校野球大会において大正十年、十一年と連続優勝しており、卒業生チームは前年優勝選手、在校生チームは本年優勝選手により構成されていた。引き続き講堂において小学校・中学校生徒の成績品を御覧になる。

初の野球観戦は、当時の中等学校野球のまさにトップレベルの試合だったのである。当日球審を務めた出来助三郎は、次のように述べている<sup>11)</sup>。

その事が発表されるや遠く台湾、満州始め全国各地の中学野球部から多くの祝電を送られ数百通にも達したのには全く驚きました。それというのも当时尚それらの各地で野球は一般人には余り理解されておらず、却って種々圧迫を受けていた状態でしたからこの和中の光栄を心から祝福してくれたものです。

皇太子による台覧は、なおも存在する野球に対する「圧迫」の中で、それを皇室の権威によって跳ね返す画期的な事件として、全国の中学野球部の注目と期待を集めたのである<sup>12)</sup>。つづけて出来は、台覧試合当日のようすを次のように述べている<sup>13)</sup>。

忘れもしない12月2日、前日四国大演習からの御帰途、お召艦「伊勢」で加太に御上陸遊ばされた皇太子殿下(昭和天皇)を和中校庭に御迎えして県下中等学校対抗八百米リレーを御覧に供した後、現役とOBの紅白試合が厳粛に行なわれました。球審は私がつとめ塁審はOBの花岡賢吉、小笠原道生両氏が当たり最初は30分の御予定だったのが約15分延長し丁度3回まで御観戦遊ばされました。

当日は万一を慮かって三塁側へ設けられた御座席の天幕前には支柱を立て、ネットを張りボールの飛来に備えるという物々しきでは関係者の心づかいは大変なものでした。又この機会に一塁側にコンクリートスタンドを造ったがその経費は県市及び和中父兄会三者協同出費によったので其の頃中学校校庭としては日本一の偉容を誇ったものです。

台覧が引き金となって、県・市・父兄会によるスタンドの建設がなされたというのだ。その経費は、『大阪朝日新聞』の報道によると「約一万円」であり<sup>14)</sup>、野球に対する地域的な支持を創り出すうえで皇室の権威が大きな役割を果たしたことがわかる。

試合当日は、リレーに参加した県下15校の生

徒や父兄、来賓らも押し寄せ、新築のスタンドは もちろん外野の周囲も埋め尽くされた。11 時 51 分に到着した皇太子裕仁は、歴史と数学の授業などを台覧した後、運動場へと移動し、久邇宮朝融とともに 5,000 人余の生徒が最敬礼するなか席に着き、15 校対抗の 800 メートルリレーを台覧した。昼食をはさんで午後 0 時 50 分、裕仁が再び運動場に戻ったところで、和歌山中学野球部の現役対OBの試合が始まる。試合は、OBチームが 3 点リードで迎えた 4 回の裏、現役チームがホームランで 1 点を返すが、ここでゲーム終了、3 対 1 でOBチームが勝利した<sup>19)</sup>。

全国の中学野球部が期待したという台覧試合の効果、すなわち野球に対する「圧迫」を跳ね返すという効果はどれほどのものだったのか？ この点を実証するのは困難だが、たとえば 1923 年 8 月 19 日には、鳴尾球場（阪神電鉄設立）で開催されていた全国中等学校野球大会の準決勝、和歌山中学対松江中学、甲陽中学対立命館中学の試合が、スタンドから大観衆があふれ出したために混乱に陥り、結局観衆を二分して 2 試合を同時に開催することによってどうにか試合実施にこぎつけるという事件が起こっている。この事件が阪神電鉄に新たな野球場の設立を決意させ、翌 24 年 8 月に甲子園球場が設立されるのである<sup>20)</sup>が、注目すべきは、それが台覧試合の翌年に起こっていることである<sup>21)</sup>。野球に対する「圧迫」を跳ね返すうえで台覧試合は効果を発揮し、人気が高まりつつあった中等学校野球の強力な後ろ盾となったのではないだろうか。

ところで、1922 年に皇太子裕仁の野球観戦が実現したのはなぜだろうか？ 裕仁は半年におよぶヨーロッパ外遊から帰国後、1921 年 11 月に病状が悪化していた大正天皇に代わって政務を行なうため摂政に就任する。それと同時に自身がスポーツマンであり、また熱心なスポーツファンであるということがメディアを通して国民にアピールされるようになる<sup>22)</sup>。また、1923 年 5 月に大阪で開催された第 6 回極東選手権競技大会では、1 歳下の秩父宮雍仁が総裁を務め、さらに優勝国に対し

て大正天皇より下賜された天皇杯が授与されるなど皇室をあげてのスポーツが奨励されるようになる<sup>19)</sup>。それは、国民との距離を縮め、新しい皇室像をアピールしていくという英国王室等をモデルとした皇室の生き残り戦略の一翼を担うものであったが、裕仁の初の野球観戦は、こうした中で実現をみたのである。

だが、国民との距離を縮めるというこの戦略も、実際の場面では、国民との距離が不可侵の境界線によって明確に区分され、皇室の権威が厳然と保たれていた。和歌山中学での野球観戦が、「厳粛」な空気の中で行なわれ、皇太子裕仁に対して飛来したボールに当たらぬように「物々」しい対応がなされたこともその一例である。

「国体は従来の観念を執りつゝ、国民には漸次接近する方皇室安泰の爲め適当なり」というのは、東宮武官長の奈良武次が「宮内官の大部」の意見として記しているもの<sup>20)</sup>だが、こうした皇室の基本姿勢は、スポーツ観戦の場でも貫かれていたとみていいだろう。

## 2) 古式泳法の台覧

「本邦の球史あつて以来の光榮ある摂政宮殿下の台覧試合」——全国中等学校野球大会の主催者である『大阪朝日新聞』は、12 月 3 日付夕刊で、皇太子裕仁の初の野球観戦をこう表現したが、実は和歌山県下巡啓の際に台覧に供したのは、野球だけではなかった。

裕仁は、野球観戦の前日、12 月 1 日に遊泳術や水術などと呼ばれていた古式泳法を台覧している。『昭和天皇実録』では、自動車で「城ヶ崎付近を御通過の際には、車窓より大日本武徳会和歌山支部員等による野島流・岩倉流の古式水泳を御覧」になったとしか記されていない<sup>21)</sup>が、11 月 23 日付『和歌山新報』の予告記事には、

- 一、立泳 川上伝之丞（岩倉流）
- 一、掻分 丸山敬夫（同）
- 一、捨浮 志摩静一（能島流）
- 一、二つ掻 大谷半次郎（岩倉流）
- 一、水画 南川勇次郎（岩倉）

一、跳込 岡村治人（水府流）

一、小拔手 同（同）

と岩倉流、能島流、水府流の3流派6名の氏名と台覧予定の計7つの泳法があげられている<sup>22)</sup>。そして台覧の翌日、12月2日付『和歌山新報』は、「水泳台覧 運動好の殿下には御感斜ならず」という見出しで、当日の午後0時3分より、上記の6名の「光栄ある泳士」が、「整然として一糸乱れず折柄風出て浪高き碧潮に男性美をひたして泳ぎ、逆跳、小拔手の秘術、立掻き分け、二つ掻き、捨浮、水画等の妙技を台覧に供」したと報じている。

こうした流派は、現在、古式泳法や日本泳法と呼ばれているが、もともと戦闘技術から生まれた武術である。たとえば掻分とは、平泳ぎの手を真っ直ぐ前に出した後、手で水を圧え後方に水を跳ね、水面へ上半身を飛び出させ、その手をすぐに側方より前方に戻すという、障害物からの回避や過流からの脱出などの際に使う泳法であり、スピードを競う近代泳法とは大きく異なる<sup>23)</sup>。

同記事によると、水府流の岡村治人は和歌山県水産試験場長で、それ以外の5名の肩書は大日本武徳会和歌山支部となっている。大日本武徳会とは、京都に本部を置き、各府県に支部をもつ全国的な武道総合団体（当時の総裁は久邇宮邦彦）であり、古式泳法も軍事的な実用性という観点から、奨励すべき武術として位置づけていた<sup>24)</sup>。和歌山支部でも、1901年に水泳術講習部を設けて水泳講習を開始している<sup>25)</sup>。和歌山における古式泳法は、武術として命脈が保たれてきたのである。

さらに2日付『和歌山新報』は、皇太子裕仁がこれらの「水泳選手」たちに対して、「武徳会和歌山支部水泳部選手の水泳は甚見事で結構であつた」「寒い際だから何れも身体に別段の障りはなかつたか」との「有難きお言葉」をかけ、「5名の選手に際しお菓子を御下賜遊ばされたが泳士一同は恐懼惜く処を知らず只有難さに感泣するのみであつた」とある。「有難さに感泣」というのがこの記事の見出しである。

地方行幸啓の際に当地の物産品などを披露するという光景は多くの訪問先で見られることだが、

和歌山の場合は、冬にもかかわらず伝統的な古式泳法がそのひとつに選ばれたのだ。「私は何も下手であるが唯水泳だけは人に負けはせぬ」<sup>26)</sup>。これは古式泳法の台覧の前日に皇太子裕仁が折原兵庫県知事に語った言葉だが、この台覧企画は、単に「運動好」きの裕仁の嗜好に合わせというだけでなく、裕仁自身が小堀流という古式泳法に長けていることをふまえての選択であろう。

こうして和歌山県下巡啓では、和歌山県が誇る古式泳法とともに全国一の和歌山中学野球部が台覧の対象となり、全体として日本の伝統文化の継承と西洋文化の摂取という両面がバランスよくアピールされていたのである。摂政就任後、皇室をあげて西洋スポーツの奨励がなされていくが、同時にそこには武術として継承されていた日本の古式泳法の奨励等も組み込まれていたのだ。

### 3) 側近たちの言説

同様のことは、皇太子裕仁に関する側近たちの言説の中にもみることができる。

たとえば、学習院院長乃木希典の要望で海軍籍のまま学習院御用掛に任用され、その後も御学問所の幹事を務め、裕仁の教育に長くかかわった小笠原長生。1922年7月、小笠原は、青年を対象に行なった「摂政宮殿下の御修養に倣ひ奉れ」という題目の講演の中で、見習うべき裕仁の「御徳」として、「他に対する同情」「御精励」「体育」「質素」の4つをあげ、次のように主張した<sup>27)</sup>。

「体育」は、鍛錬と衛生の2つとも努力を怠ることがない。衛生面では「御日常の万事は実に規則正しく」「放縦に流れる」ということがなく、身体の鍛錬については、冬でもなるべく薄着で過ごし、夏には、目眩がするほどの日向に出て、体操、教練、登山、遠足、遠乗りなど、「尚武的運動」により、寸暇を惜しんで鍛錬を行なっている。現在の心身の健やかさは、まさにその成果に他ならない。昨年ヨーロッパ外遊の際には、新聞でも報道されたとおり、灼熱の軍艦の上でも相撲によって身体を鍛えた。このような皇太子の姿を「活きた模範」とすることによって、「剛健なる国民」

となることができるのだ。

小笠原は、さらに皇太子が撃剣の時にも自分で道具をつけ、決して他の者の手を借りないといったことを、「質素」という徳を示すものとしてあげている。

以上のような小笠原の主張のなかで注目すべきことは、皇太子裕仁が日常的な運動として実施していたゴルフやテニス<sup>28)</sup>が全く登場していないことである。もっぱら軍事的な訓練や武道によって、裕仁が身心を鍛錬し、徳を積んでいるかのような主張となっている。小笠原は、裕仁を「活きた模範」として青年たちに説いているのだが、その内容は実像とは異なり、西洋スポーツを排除したものであったのだ。

## 2. 1926年の六大学野球紅白戦

### 1) 六大学野球紅白戦の観戦と東宮杯の下賜

2度目の野球観戦は、明治神宮外苑野球場の開場式当日、1926（大正15）年10月23日に開催された六大学野球の選抜選手による紅白戦である。

明治神宮外苑には、その2年前、1924年10月に400メートルトラックと3万5,000人収容の陸上競技場が設立され、その完成と合わせて内務省主催で明治神宮競技大会が始まった<sup>29)</sup>。その後、野球人気の急激な高まりを中、東京六大学リーグの指導者たちを中心とした強力な働きかけによって、収容人数3万人の明治神宮外苑野球場が設立されるのである<sup>30)</sup>。

この日、皇太子裕仁は、球場開きのイベントとして行なわれた東京・神奈川の中等学校選抜チームの試合の終了後、全観客が起立、最敬礼するなかで、浜口内務大臣らとともに入場した<sup>31)</sup>。つづいて、軍楽隊を先頭に六大学野球部および東京・神奈川の中等学校の17チームのよる入場行進、君が代斉唱を行なわれ、メインイベントである六大学選抜選手による紅白戦が始まる。裕仁は、2万5,000人の観衆とともに、六大学野球リーグの代表で早稲田大学教授の安部磯雄らの説明を受け

ながら約2時間にわたって試合終了まで観戦したが、試合は紅軍の優勢のまま進み、白軍がホームランで1点を返すも、5対1で紅軍が勝利した<sup>32)</sup>。その途中で宮内官より安部に対して、六大学野球リーグへ裕仁より優勝カップが下賜されることが告げられ、その目録が渡された。また、御下賜金100円と菓子も下賜されたが、関係者による協議の結果、御下賜金で京浜中等学校野球リーグの優勝カップを作成し、長くこの「光栄」を記念することとなった<sup>33)</sup>。

一方、東京六大学野球リーグの優勝カップ「東宮杯」は、同年12月に東宮御所で、東宮大夫の珍田捨巳より安部に手渡され<sup>34)</sup>、以後六大学野球の春・秋季リーグの優勝チームに授与されるようになる。

東京の大学野球リーグの始まりは1914年であるが、この時の加盟校は早稲田、慶応、明治の3校だけであり、しかも早慶両校が対戦しないという「全く変態的リーグ戦」<sup>35)</sup>であった。法政、立教、東京帝大が加わって6大学となり、早慶戦を含むリーグ戦が正式にスタートするのは1925年の秋からであり、プロ野球が設立されていない当時、最もレベルが高かったこのリーグが絶大な人気を誇るようになる。とくに1906年に両校の応援団の衝突を回避するために中止されて以降、19年もの空白をへて復活した早慶戦は、リーグ優勝以上に人々の関心を惹きつるという事態を生み出した。

「東宮杯」の下賜は、六大学野球リーグが始まって1年後のことであり、皇太子裕仁の野球奨励の意思を鮮明にアピールするものとなるとともに、同リーグを頂点とする野球人気の上昇にさらにはずみをつけたとっていいだろう。翌27年11月6日の早慶戦には、3万5,000人の観衆が神宮球場に押し寄せ、入場料収入も過去最高の1万6,779円を記録した。この年には、六大学野球リーグおよび全国中等学校野球大会のラジオ中継も始まり、29年からは全国中継施設の完成によって全国放送化が実現する。こうして「野球狂時代」と形容されるような野球に対する熱狂が生み出されている

くのである<sup>36)</sup>。

## 2) 伝統スポーツとのバランス

六大学野球リーグへの「東宮杯」の下賜。それは、ひとりの剣道部員が「舶来ものの野球の六大学リーグ戦は摂政盃を下賜されているのに、日本古来の武道にこのことなきは如何？」<sup>37)</sup>と不満をぶつけたように、伝統スポーツの側からの批判を生み出す行為でもあったが、皇室は西洋スポーツの奨励にのみ力を入れていたわけではない。

実は明治神宮外苑の球場開きに先立って、当日の午前中、皇太子裕仁は外苑の相撲場の開場式にも出席しており、そこで常の花と西の海による三段構土壌入り、東西幕内力士の揃い踏み、奉納相撲としての勝ち抜き決勝相撲を大観衆とともに観戦している<sup>38)</sup>。野球に先がけて相撲奨励のアピールも行なっていたのだ。

また、同年5月の大相撲夏場所からは、優勝力士に「賜杯」が授与されるようになっていた。大相撲の「賜杯」は、皇太子裕仁によって下賜されたものではなく、1925年4月、裕仁の24歳の誕生日に開催された台覧相撲の際の御下賜金によって、その翌年に東京大角力協会が製作したものであった。それが六大学野球リーグに「東宮杯」を下賜する半年前にすでに登場しており、「賜杯」のゆくえに全国の相撲ファンが注目するようになっていたのだ。

このように野球の奨励は、実は国技とされる相撲の奨励とセットでなされていたのであり、1922年の和歌山行啓の際と同様、伝統文化と西洋文化の両者をバランスよくアピールするものとなっているのである。

関連した事例は、他にもみられる。たとえば、上記の六大学野球の紅白戦の8日前、10月15日から約1カ月間開催された東京市主催の「体育と衛生の展覧会」に皇太子裕仁が出展した愛用の運動用具は、馬具と投槍であった。また、この時展示された大正天皇の愛用品も、弓と矢、運動靴、コーナーサークル(胸を強くする用具)、撃剣道具というものであり、これに対し、弟の秩父宮の愛

用品として展示されたのは、スキーやホッケー靴など、また、裕仁の義兄、久邇宮朝融の愛用品は野球用具などであった<sup>39)</sup>。小さな出来事ではあるが、ここには西洋スポーツの愛好者という従来の皇太子裕仁のイメージを極力抑え、それと同時に裕仁に替わって雍仁や久邇宮らが、西洋スポーツを愛好するスポーツマンとしてアピールされている様子が見て取れる<sup>40)</sup>。

ちなみに朝日新聞社が隔週で発行していた『アサヒスポーツ』が、皇太子裕仁を写真入りで報道したのは、富士登山を報じた1923年8月15日号が最後であり、それ以降は、「我が国の皇族中最も雄偉な体格の御所有者であり、又優秀なスポーツマンであらせられる秩父宮雍仁親王殿下」や裕仁の義兄である久邇宮朝融らが「スポーツの宮様」として脚光を浴びるようになっていく<sup>41)</sup>。とくに秩父宮は、1925年には英国オックスフォード大学に留学し、同校でボートの練習に本格的に取り組み、夏には欧州大陸に渡り、念願のアルプス・マッターホルンを踏破するなど「スポーツの宮様」ぶりをさらに発揮していった<sup>42)</sup>。

## 3. 1929年の明治神宮大会における早慶戦

### 1) 早慶戦の観戦

3回目の野球観戦は、第5回明治神宮体育大会の5日目、1929(昭和4)年11月1日の早慶戦である。前年11月の即位大礼以降、正式に天皇となった裕仁を祝福する各種の即位大礼記念行事が開催されたが、明治神宮体育大会への行幸もそのひとつであった。

予め指摘しておく、これまでと同様この時も伝統スポーツの奨励がセットでなされている。同年5月4~5日に即位大礼記念行事として、宮内省自らが主催した「御大礼記念天覧武道大会」がそれである。場所は済寧館という皇居内の武道場であり、昭和天皇は、2日目の午後1時から、最後の柔道指定選士の決勝戦が終わる5時30分まで、途中休憩をはさんで計3時間30分にわたっ

てこの大会を観戦している<sup>49)</sup>。この大会は、武道の国家的意義を再認識させ、その復興の機運をつくり出す巨大なインパクトとなった<sup>40)</sup>。

早慶戦の観戦は、「天覧武道大会」の半年後の11月1日である。天皇は、この日の午後1時から、1時間にわたって明治神宮体育大会の陸上、バレーボール、ホッケーを観戦した後、自動車で相撲場へ移動し、正面に設けられたテント張りの玉座から身を乗り出して、青年団員による相撲を2組観戦した。

2時30分、3万人の観客で埋め尽くされた外苑の野球場に「君が代」が流れ、役員、観客が最敬礼する中、昭和天皇は正面の玉座に着席し、試合が開始された。この試合の説明役を務めたのも、先の神宮球場開きの時と同じ早大の安部磯雄であり、大会総裁を務める秩父宮を介して質問と説明のやり取りがなされた。試合は、慶応が3回表に5点を入れ、その裏の早稲田の攻撃が無得点に終わって5対0。天皇はここで席を立った。時刻は3時22分、予定の時刻を20分あまり過ぎていた。両選手はふたたびネット前に整列し、観客が全員起立するなか、審判の発声で「天皇陛下万歳」を唱え、秩父宮の見送りで天皇は球場を後にした<sup>45)</sup>。

このように早慶戦には、明治神宮体育大会の観戦のなかで最も多くの時間が割かれたが、それでも55分であり、当日には相撲観戦もなされている。

## 2) 観衆はどう受け止めたのか

この日の早慶戦を観戦した3万人の観衆の中には、慶応大OBで作家の水戸瀧太郎もいた。水戸がこの一戦を記した「天覧野球試合陪観之記」<sup>46)</sup>によって、観衆がこの台覧試合をどう受け止めたのかという点を検討してみたい。

「天皇様にベエス・ボオルを御目にかけてたい——これはかねてよりの私の心からなる願いであった」という水戸は、「この心持は、敢て私のみのものでは無かったと見えて、この度明治神宮体育大会の六日目に、各種競技をみそなわせられ、慶応と早稲田の野球試合をもご覧遊ばされたのである」

と天皇の野球観戦が実現した喜びを語り、さらに「その日スタンドの一隅に卑賤の身を謹んで陪観の榮に浴した私は、些か感想を記して子孫の為に伝えようと思うのである」と自身の執筆動機を記している。水上にとってこの台覧試合は、後世に伝えるべき歴史的な事件であったわけだが、その意味について次のように述べる。

吾々民草は、御治世のありがたさで、勝手気儘に行楽をほしいままにしているが、天子様には日夜此の国のまつりごとに大御心を煩わされ、いかなる御仕事があるのか吾々にはうかがい知る事も許されないが、御精励の程仰ぐもかしこしとうけたまわる。(中略)

ただでさえ御忙しいところを、奸臣どもが御心を煩わす事が多いのであるから、たまには青空の下に雲白の熱球の飛ぶ壮観を御目にかけて、御慰め申上げるのが、善良なる人民の忠義のひとつである。身分いやしくして、御側近くへ侍する事はかなわずとも、せめては嘘いつわりの無い遊びの庭に台覧を仰ぎ、うるわしきみけしきをおろがみまつる事こそ、こよなき喜びであらねばならぬ。

水上がいう「行楽」に野球観戦が入ることはいうまでもないだろう。水上は、自分たちが勝手気ままに「行楽」ができるのは、天皇による統治のおかげであるという。また、「身分いやしくして、御側近くへ侍する事はかなわず」と天皇と間に厳然として存在する身分上の隔たりをふまえた上で、日々多忙で多くの苦勞をかかえながら政務にたずさわっている天皇に、野球観戦という「行楽」によって気晴しの機会を提供することは、「善良なる人民の忠義のひとつ」であるというのである。つまり、人民が天皇に対する日頃の感謝と忠義を示すイベントとしてこの台覧試合を意味づけているのだ。

「嘘いつわりの無い遊びの庭」「青空の下に雲白の熱球の飛ぶ壮観」とは、野球観戦の魅力についての作家ならではの巧みな表現とあっていいだろう。また、早慶戦がもたらす熱狂についても、「山王様と明神様のおみこしが一時におでましになったような盛観」と例え、「私立の二大学という意味

もあるにはあるが、主として昂奮と感激の歴史を有するベセス・ボオルのおかげと見なければならぬ」と野球がもたらす興奮と感激の歴史こそが根本的な理由だという。早慶「両校の熱情に動かされ、遂に私も六大学リーグ戦のスタンドに、一喜一憂を味う身となった」という水上自身の体験と実感にもとづく評価であろう。

この日、午前8時前に三塁側本塁近くのスタンドの席についた水上は、試合前の球場内の情景についても描写しているが、まず彼の目にとまったのは応援団の様子である。服装が普段とちがうのだ。

此の日天子様の御前であるにも拘らず、平静の通り応援をさしゆるされたのは、ありがたい思召である。殊に私が天覧のありがたさを痛感したのは、早稲田の応援隊が、いつもと違って極めておとなしい様子をしていた事である。慶応は常に制服を着用しているが、早稲田と来ると、木綿の紋つきの羽織、白袴、素足に下駄をはき、中には白だすきという凄いのもあり、軍扇をかざすのはまだしもいい方で、何の必要があるのか棍棒や、弓の折れ、木刀などをひっさげたものもあり、苦々しい事に思っていたが、此の日はみんな制服で、一人も異風の者を見なかったのは気持ちがよかった。例の芝居がかりの豪傑風が、天子様の御目に触れてはおそれおおいという理由で差し控えたのかとも思うが、一説には、前以ておかみの注意を受け入れたのだとも云う。どっちにしても、天子様の御前に出られないような無礼な風体は、平生から慎むのが当たり前だから、今後はあまり人を脅かすようなよそおいはやめる方がいい。

天皇の権威は、早大応援団の「豪傑風」の服装を「極めておとなしい」ものに変えるほどの規制力をもっていたのだ。

また、「この日は朝来曇天だったが、天子様が御臨場になる少し前、俄に球場をうす日がさした。えらいもんだなあ、天子様がいらっしゃったら後光がさしたと、誰かうしろの方でつぶやいた」と

いう描写からは、昭和天皇が神格化している様子を知ることができるだろう。1928年11月に京都で実施された大嘗祭など、即位大礼の神々しい儀式は、昭和天皇が“現人神”となることを体現するものであったが、そのような天皇像が国民の間にも広くしみ込んでいくのである。

さて、天皇の入場である。「愈々天子様がいらっしゃった。練習を切り上げ両軍の選手も、朝の試合に出た中等学校の選手も、審判官も列をつくってお迎え申し上げ、吾々陪観者も一斉に起立した。帽子をとれ、帽子をとれと、他人の頭の蠅を追うように怒鳴るのは早稲田側のスタンドで、慶応側には大声を発する者は一人もなかった。陸軍軍楽隊が君が代の曲を奏し、四万の人民が頭をさげて敬礼する」。私語がかき消され、厳粛な空気が球場全体を覆うなかでの君が代、そして天皇への敬礼。それがこの場での天皇と国民のタテ関係を象徴する儀礼であった。

この時、水上は「おそれおおい事ではあるが、私は玉座の方を一心に見詰めていた」。そしてその後、グラウンドでくり広げられている試合だけでなく、天皇にも目を向けている。

秩父宮様の御姿も拝した。御兄弟とは申せ、吾々下々とは違って、御礼儀が正しいのであるから、宮様は天子様のななめうしろに、稍間隔を置いて御町重なる礼を遊ばされ、少し離れた椅子に御かけになった。妃殿下もいらっしゃった。その他の宮様方も御揃いだ。秩父宮様のおうしろに、社会民衆党の大だても安部磯雄氏と長与又郎博士が控えている。

(中略) 秩父宮様は天子様の御側に行かれ、先ず早稲田側を指さし、次に慶応側を指さして何か御説明遊ばされた。天子様にはいちいち大きくうなずかせ給うのであった。

秩父宮をはじめとする周辺の人々と裕仁との関係もまた、裕仁の天皇としての権威を可視化するものとして機能しているのである。

さらに水上は、天皇の服装の変化にも気づく。「気がつくと、天子様には御風気のおあとと承るのに、マントオを御脱ぎになり、陸軍通常御礼服



の御姿凛々しく、子等が遊びをみそなわすのであった」。風邪気味にもかかわらずマントを脱ぐという行為は、天皇の御聖徳（人格や能力）をアピールするものであり、水上の心を動かしている。また、陸軍通常礼服の凛々しい姿は、陸海軍を統帥する大元帥として天皇を象徴するものに他ならない<sup>47)</sup>。

先にも述べたように天皇は、3 回裏の早稲田の攻撃が終わったところで退席するが、「ふたたび君が代の奏楽のうちに、天子様の尊き御姿は、玉座をはなさせ給い、池田審判官の発声で、吾々人民は声を尽くして万歳を三唱した」。

試合中の天皇の様子を見ての判断であろう、水上は「おそれおおい事ながら、野球競技は、天子様の御心にかなったように拝し参らせた」と評している。一方、試合の途中で退席したことについては、「尊い御体であり、又御政務がお忙しいのであろうから、望んでもかなわない事かもしれないが、出来る事ならば最終回迄御目にかけて度かった」と卒直な感想を記し、「そして来春からは、慶応と早稲田との試合の度毎に天覧を忝くする光栄に浴し度いものである」と希望を述べている。

この時の野球観戦の予定時間は 30 分程度であり、実際には延長して 55 分間観戦したものの試合途中で退席するという観戦スタイルをとっていることに変わりはない。それは、水上のような野球ファンを残念がらせるとともに、玉体（天皇の身体）の尊さや政務の多忙さを象徴するものでもあり、観衆にそれを示す儀礼的行為となっていたのだ。

ところで、この試合に慶応の選手として出場した水原茂は、「ベンチで、『陛下は野球がわかるだろうか』と話しあっていました」と述べている<sup>48)</sup>。六大学野球の選手が「東宮杯」の由来を知らないはずはなく、つまり昭和天皇が 3 年前、1926 年の六大学野球紅白戦を観戦したことは、周知の事実であったはずだ。その天皇に「野球がわかるだろうか」と疑問を抱くというのはどういうことなのか。それは、計 3 回の野球観戦も、「東宮杯」の下賜も、天皇が熱心な野球ファンであると

いうイメージを国民のあいだに浸透させるものではなかったということを物語っている。大衆的な人気が最も高かった野球と天皇との距離は、国民と天皇の間にある不可侵の境界線と同様、ほとんど縮まることなく厳然と保たれてきたということではないだろうか。

#### 4. 1930 年の静岡中学対静岡商業戦

##### 1) 行幸の概要

4 回目の野球観戦は、1930（昭和 5）年 5 月 29 日の静岡中学対静岡商業戦である<sup>49)</sup>。これは、昭和天皇の静岡県下巡幸の一環として、静岡中学への行幸がなされた際に実施されたものである。

まずは当日の「御臨幸次第」によって、静岡中学関係の行幸の全容をみておこう<sup>50)</sup>。

- 一、午前 9 時 28 分、本校御着輦、予定 17 分前。
- 一、御座所に入御。
- 一、校長拝謁 内大臣 宮大臣、県知事等侍立の下に学校の状況奏上（午前 9 時 35 分迄）
- 一、本校有資格職員 7 名理科実験教室前廊下に於て列立拝謁。
- 一、講堂に於て本県公私立中学校長列立拝謁（午前 9 時 37 分迄）
- 一、国語科授業第 5 学年甲組伊佐芹教授囑託、英語科授業第 3 学年丁組原教諭 右実地授業御覧（午前 9 時 47 分迄）
- 一、本校運動場に於て本校対静岡商業学校野球天覧（午前 9 時 59 分迄）
- 一、本校武道々場に於て本校第 4 学年生柔剣道授業、本県武徳会支部員柔剣道試合並に弓道礼射天覧（午前 10 時 12 分迄）
- 一、本校プールに於て本校並に県立浜松第一中学校同見付中学校同中泉農学校生徒の水泳天覧（午前 10 時 23 分迄）
- 一、午前 10 時 25 分、還御。  
正午安東練兵場に於て興行の御親閲式に

参列、参加人員職員 23 名生徒 707 名、午後 1 時 48 分式開始午後 2 時 25 分終了、外に拝観部隊参加の職員生徒 228 名

静岡中学の行幸そのものは、午前 9 時 28 分から 10 時 25 分までの 57 分間であり、そこにこれほど多くの内容を詰め込んでいるのである。1930 年 5 月 17 日付『静岡民友』によると、静岡中学の伊藤校長は、運動競技の天覧を申し出て、とくに「野球天覧の希望は十分に伝達する」との行幸主務官の言葉を引き出している。静岡中学は、全国中等学校野球大会の常連校であり、甲子園球場で初めて開催された 1926 年の第 12 回大会で優勝しており、同校のみならず静岡県のプライドの表象となっていたのだろう<sup>30</sup>。それでも行幸当日のスポーツ観戦は、野球に重点を置いたものとはなっておらず、柔道、剣道、弓道、水泳を含んだ和洋文化のバランスのとれた構成となっている。

## 2) 行幸の準備

昭和天皇の行幸が決定してから、静岡中学では学校をあげてその準備が進められた。伊藤校長が率先して校舎その他の清掃にあたり、数回にわたる校内大掃除、教室の整理、草取り、壁塗りなどが行われた。天覧の授業クラスは、浅間神社に行って校長自らがお祓いを受けて作ったクジを各級長に引かせて決定したが、天覧の「光栄」を当てたクラスの生徒は、「毎日自発的に放課後裸足になって、曹達水で床を洗ひ、曹達水で床を洗ひ、机を拭き、硝子を磨」き、時に「タワシや雑巾を持つ手を休めて、〔天皇が――引用者注〕此のあたりに御立ちになるだらうかなど言つては、呆然となった」（5 年・奥野茂）。

こうして学校は塵ひとつないまでに磨き上げられ、校門も改善された。計 7 カ所に設置された白木の玉座には白布が掛けられた（行幸の後、玉座に使用された木材は細分され、生徒一人一人に「のちに一家をなす時の門標にせよ」といって配られた）。「行幸前一週間はネギ類を食うな」という指導もあったという。

こうして行幸の準備が進む最中、伊藤校長が一

週間行方不明になったが、学校に現れるや生徒を講堂に集めて、「我が輩は高野佐三郎先生の道場で腹の切り方七型を習ってきたぞ」と発言したため、生徒は大いに緊張したという。行幸の際に何か不敬を冒すようなことが起きた場合には、日本刀で割腹自殺して責任をとる覚悟であることを示したのであろう。

行幸の前日は、校内に歩哨を立て、夜中の見回りをした。また、校門から校舎に至るまで玉砂利と砂とが規則正しく撒かれた。

## 3) 行幸当日と生徒たちの感想

早朝にプールに飛び込んで身を浄めた伊藤校長は、天皇に拝謁し、同校の教育方針について説明したが、その内容は「教育ノ方針ハ日常行為ノ基準ヲ 陛下ノ大御心ヲ安ンジ奉ルト申スコトニ置キマシテ之ガ具体的方法トシテハ生徒個々ノ一身ノ事情ヲ熟知シテ善導致ストイフコトデゴザイマスル」と、生徒の日常行為と天皇の御心を直結させるというものだった。

天皇は、まず国語と英語の授業を台覧するが、英語の授業を担当した原は、「直立不動の姿勢で授業をすゝめたが、実際電気にでも打たれた如く身は固くなって一生懸命に声を出してみた様に思はれる。……勿論玉座と殆ど同じ高さの教壇には登らうと思へなかつた」述べている。天皇に対して直立不動の姿勢をとること、天皇より低い位置に身を置くことが必須のこととされているのである。つづいて野球観戦が行われた。

9 時 47 分、記念館前の庭上設けの玉座に御英姿を仰ぐ、此の時場の内外水を打ちたるが如く静粛に、陪観の客員及び両校生徒約二千深夜の林の如く動かず。小林教官の号令にて一同最敬礼を為し終わるや否や両校選手各シートに散る。球審丸尾氏声高らかにプレーボールを宣し。陪観の両校生徒より拍手万雷の如く起こる。

玉座に着いた天皇に対する両校生徒等 2,000 名による最敬礼。それを包む静粛。この試合では、サードコーチはお尻を玉座に向けてはならぬと指

示され、苦勞してコーチボックスに立った。投手鈴木芳太郎は、カーブを投げてはならぬと命じられ、観覧の両校生徒も全員検便を受けていたという。天皇の神聖さを冒すと判断されるものはことごとく排除されたのだ。

試合は、静岡商業の先攻で、1回は共に三者凡退、2回の表、静中が2アウト後、左翼にテキサスヒットを放ったが、ここで予定の時間となり、小林教官の号令で、選手はシートについたままで一同最敬礼し、試合を終えた。

その後、天皇は武道場で、武道の試合などを台覧するが、生徒の一人は、「畏れ多くも道場に入場の時、御帽子を御自ら御脱ぎになられた時には、唯々畏れ多いとばかり感ぜられた。……我等如き若輩が、一天万乗の陛下に僅か四間とは離れない距離に於て、拙い業を御覧に入れる事は、全く身に余る光栄であるが、陛下が斯くまでの御熱心な大御心を拝察する時全く感泣せざるを得ないのである」(4年生・海野修一)とこの時の心情を記している。

天皇が武道場で帽子を脱いだこと、また、わずか四間つまり7メートルほどの距離で生徒らの武道を台覧したことは、その「御熱心な大御心」を示すものとして「感泣せざるを得ない」ほどの感激を生徒に与えている。

水泳については、生徒の次のような発言に着目したい。「練習中吾々が常に困められた事は、水泳には殊に御目の高い陛下の御前で、泳ぐと言ふ事が、いかにも恥しい、と言ふ心のひけめで、之が為に吾々の意気はとかく沮喪しがちになるのです。遂に先生方も御気付きになり、『技術よりも、若人の元気を御覧に入れよばよいのだ。』と口をすくして仰せられました。そこでやっと納得が出来、それからは唯元気一杯で泳ぎました」(5年生・斎藤純郎)。水泳の台覧は、天皇が水泳を得意としていたことをふまえてのものであったと思われるが、そのことが生徒たちにとって大きなプレッシャーとなっていたのだ。

なお、静岡中学の行啓の後、正午からは安東練兵場で大観閲式が行われ、静岡中学からは707名

の生徒が参加した。

佐藤少佐の号令と共に僕等は行進を始めた。(中略)しばらく行進した後、「頭右」号令と共に満身の熱誠をこめて注目した。あゝ其の時！僕は挙手の御答礼をされぬ御英姿、殊に純白の手袋をはめられた御手を拝した時、侵し難いが非常に親しみ深い感に打たれた事をはっきり感じた。さうして純白の手袋を通して僕の心は、大君の有難さをはっきり感ずる事が出来たのである。

此の時僕は何だか高潔を現はす純白と、大御心とに深い神秘的な関係があるやうに思われた。注目が済んで行進してゆく時でも、はっきりと僕の印象に残ってゐるのものは、純白な手袋を御手にはめられて挙手の御答礼をされてゐる、大君の英姿であった。自分は『ギリシヤ』か何処かの神話でも思ふやうに『手袋と大君』と独りで、つぶやいてみた。(3年生・河村祥)

参加した生徒が大観閲式における天皇を見た時の心情を記したものだが、挙手の答礼をする天皇の姿が、純白の手袋によって高潔さ、さらには神秘性をも醸し出している。この場合、純白の手袋が天皇を現人神として演出するうえで重要な役割を果たしているのである。

以上のような行幸を経験した生徒たちの感想には、「あゝ、此の、聖天子の下にあつて、忠良の臣民たらぬ者がありませうか。愛国の士たらぬ者がありませうか」(5年生・村松道平)、「やがて我等をして国家のまもりとして自重奉公の精神に燃えしむるであらう。身に余る光栄に浴した我等静中一千の健児は報国の義務も又大となつたのであります」(4年生・上田次郎)などであり、愛国心の高揚ぶりが示されている。この時天皇は、29歳であったが、この若さつまり生徒との年齢的な近さも、天皇への忠誠心を高める要素となっている。たとえば次のような感想である。

世の人々の中には赤化主義を言ひふらすやうな不埒な者が居る。彼等は此の厳かな姿のどこが気に入らぬのか。亦国家に対して不平

を述べるやうな者もある。彼等は恐らく此の君と民との感激の姿を考へた事すら無いのであらう。私達は此の仁慈に富ませ給ふ陛下を上に乗る我が国の姿がたのもしい。あゝ、我等が国は若い。私達はお若い

陛下と力を合せて此の国を背負ひ立つ日がまらどほしい。私達は小国民の一人としてあらんかぎりの努力をせなばならない、限りない聖恩の万分の一にむくい奉らんが為に……。私は深く心にちかったのであった。(3年生・岩崎鑑一)

こうした生徒の感想について『静中静高百年史』は、「校旗に記された『義勇奉公』の四つの文字が、実感を伴ったものとして生徒に理解されたといえるのではないだろうか」と指摘しているが、より一般的にいえば、教育勅語の根幹をなす「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」という一節を身体化するものであったということであろう。行幸という天皇の姿に直接ふれる機会は、天皇を神格化し、天皇への忠誠心を自発的に醸成する儀礼として重要な機能を果たしているのである。

## おわりに

1922年に始まる皇太子／昭和天皇裕仁の野球観戦は、国民との距離を縮め、新しい皇室像をアピールしていくという英国王室等をモデルとした皇室の生き残り戦略の一翼を担うものとして皇室をあげてスポーツが奨励されるようになる中で実現をみたものであり、野球人気の上昇にさらにはずみをつけたと考えられる。

しかし、東京六大学野球リーグに「東宮杯」を下賜してから3年後、3回目の野球観戦となる1929年時点においても、皇太子／昭和天皇裕仁が、熱心な野球ファンであるというイメージは国民のあいだに定着していない。大衆的な人気が最も高かった野球と天皇との距離は、国民と天皇の間にある不可侵の境界線と同様、ほとんど縮まること

なく厳然と保たれてきたと推定される。

また、実際の野球観戦の場面では、国民との距離が不可侵の境界線によって明確に区分され、皇室の権威が厳然と保たれていた。野球観戦の場もまた、皇太子／天皇の権威を中心とするひとつの儀礼的な空間として構成されていたのであり、とくに天皇即位後に実施された2つの台覧試合は、天皇の神格化を推し進め、また、天皇への忠誠心を自発的に醸成するといった機能を果たしていた。

1922年から30年に実施された皇太子／昭和天皇裕仁の4つの野球観戦は、いずれも当時の中等学校および大学野球における最高レベルかそれに近い水準の選手たちによるものであったが、試合終了まで観戦したのは29年の神宮野球場の開場記念として開催された六大学選抜選手による紅白戦のみであり(約2時間)、それ以外は観戦時間が45分、55分、12分と短く、また、常に相撲や武道、古式泳法などの観戦とセットでなされていた。当該期における皇室によるスポーツ奨励は、西洋スポーツに偏ったものではなく、伝統スポーツとバランスを保ったものであったのである。

その背景には、伝統文化と西洋文化をめぐる政治的な力学が作用していたと考えられるが、この点や1931年以降に野球観戦が行われなくなる状況などについては、拙書『昭和天皇とスポーツ—玉体の近代史』(吉川弘文館、2016年4月刊行予定)で検討することにした。

## 【注】

- 1) 宮内庁編『昭和天皇実録』第一(東京書籍、2015年)の1912年5月27日条。
- 2) 同上、1912年5月19日条。
- 3) 学習院輔仁会編『乃木院長記念録』三光堂、1914年、p.182。
- 4) 『東京朝日新聞』1911年9月15日付、学習院野球部百年史編集委員会編『学習院野球部百年史』学習院野球部百年史刊行会、1995年、p.102、拙書『につぼん野球の系譜学』青弓社、

2001年、pp.118-119。

- 5) 翌1913年1月14日には、次男の雍仁が同級生たちと野球を試みているが（秩父宮記念会編『雍仁親王実紀』吉川弘文館、1972年、p.126）、それは乃木院長が、明治天皇大葬の当日に妻とともに殉死を遂げてから4ヵ月後のことである。
- 6) ただし、他にも地方行幸啓の際に中学校等で野球の試合を台覧したケースがあるかもしれない。たとえば宮内庁編『昭和天皇実録』第三（東京書籍、2015年）の1922年7月18日条には、釧路中学校の校庭で生徒による「運動競技」を台覧したとある。「運動競技」などの総称で表記されているものの中に野球の試合が含まれていた可能性がゼロとはいえないだろう。
- 7) 拙書『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略』講談社、1998年、拙稿「スポーツと天皇制の脈絡——皇太子裕仁の摂政時代を中心に——」『歴史評論』第602号、2000年6月、拙書『スポーツと政治』山川出版社、2001年。
- 8) 坂本孝次郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社、1989年、pp.289-290。
- 9) 原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓〔増補版〕』みすず書房、2011年など。
- 10) 前掲『昭和天皇実録』第三の1922年12月2日条。
- 11) 松嶋正治編『和歌山中学・桐蔭高校野球百年史』和中・桐蔭野球部OB会、1997年、p.40。
- 12) 当時の午後2時までには届いた祝電は39通であり、12月3日付『大阪朝日新聞』に学校名等が掲載されている。野球に対する「圧迫」については、前掲『にっぽん野球の系譜学』pp.130-152。
- 13) 当日墨審を務めた小笠原道生は、当時東京帝国大学医学部の学生であり、弟の紀三九は現役チームの二塁手、和歌山県体育奨励会長である父親も「和中野球部愛護者の一人」で、「親子三人この光栄ある試合に加はつたので

涙を流さぬばかりの面持で陪観してみた」と12月3日付『大阪朝日新聞』夕刊は報じている。小笠原が和歌山中学一年生の時、父親が『東京朝日新聞』の野球害毒キャンペーンに影響され、小笠原に野球を禁止したことは前掲『権力装置としてのスポーツ』（pp.5-6）でも述べたが、その後状況が一変する。2年生になると校長がかかわって学校をあげて野球を奨励するようになり、4年時に第1回全国中等学校野球大会の開催という「夢のような」快報が舞い込み、小笠原が野球部員の一人として予選を勝ち抜いて本大会に出場した時には、かつて「新聞の野球害毒論に影響されていた古い世代の人々の例の先入観など、もはや跡方もなく消え失せ」、小笠原の父も野球部の後援会長を務めるようになっていた（小笠原道生『体育は教育である』不昧堂書店、1961年、pp.370-375）。小笠原道生は、1926年7月に文部省体育研究所技師となり、39年8月に同省体育課長兼体育研究所長、41年1月から44年7月までは同省体育局長と戦時期の体育行政のトップを務めた人物である（拙稿「小笠原道生」、吉田裕・森武麿・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015年）。

- 14) 『大阪朝日新聞』1922年12月3日付夕刊。
- 15) 同上。
- 16) 前掲『権力装置としてのスポーツ』pp.21-22。
- 17) 皇太子裕仁は1923年8月24日にも、長野県軽井沢の早稲田大学グラウンドで、式部次長の西園寺八郎、侍従の黒田長敬、賀陽宮常憲や当地で避暑中であった朝香宮鳩彦や北白川宮永久らとともに同大学野球部の夏季練習を観戦している。この時裕仁は、ネットに囲まれた席で、早大野球部のベースランニング、フリーバッティング、守備練習そして五イニング制の紅白戦を約一時間にわたって観戦した（桑原稲敏『天皇の野球チーム』徳間書店、1988年、pp.30-41）。前掲『昭和天皇実録』第三によると、「御観覧中、内閣総理大臣加藤

- 友三郎が午後零時三十五分危篤（実は死去）に陥った旨の報告があり、東宮大夫珍田捨巳の言上により、直ちに御帰還」になった（p.911）。なお、この夏季練習には、宮内省式部職の青山銀夫も、早大野球部の飛田忠順監督に特別に許可をもらって参加しており、この日、フリーバッティングの投手を務めている（前掲『天皇の野球チーム』pp.37-38）。
- 18) 前掲「スポーツと天皇制の脈絡」pp.30-33 など。
- 19) 同上 pp.33-36 など。
- 20) 同上 p.39。
- 21) 前掲『昭和天皇実録』第三の 1922 年 12 月 1 日条。
- 22) 那須賢二・中森一郎・南川泰秀『岩倉流 伝承 300 年のあゆみ』伊勢新聞社、2010 年、pp.112-114 より再引。以下の『和歌山新報』の記事も同じ。
- 23) 同上 pp.33-35。
- 24) 拙稿「大日本武徳会の成立過程と構造——1895～1904 年——」『行政社会論集』福島大学行政社会学会、第 1 巻第 3・4 合併号、1989 年、p.89。
- 25) 前掲『岩倉流』pp.85-130。
- 26) 『大阪朝日新聞』1922 年 12 月 2 日付。皇太子裕仁の古式泳法の技量については、甘露寺受長『天皇さま』講談社、1975 年、pp.48-50。
- 27) 聖徳奉賛会編『聖上御聖徳録』聖徳奉賛会、1931 年 pp.325-347。
- 28) 前掲『天皇さま』pp.186-187、田代靖尚『昭和天皇のゴルフ』主婦の友社、2012 年など。
- 29) 佐藤一伯『明治聖徳論の研究—明治神宮の神学—』国書刊行会、2010 年、第 8 章「明治神宮外苑の創設と阪谷芳郎」、藤田大誠「明治神宮外苑造営における体育・スポーツ施設構想—『明治神宮体育大会』研究序説」『国学院大学人間開発学研究』第 4 号、2013 年、同「神宮外苑になぜ競技場が造られたのか」『春秋』554 号、2013 年。
- 30) 明治神宮外苑野球場の設立の経緯については、藤田大誠「明治神宮競技大会創設と神宮球場建設に関する一考察—内務省衛生局と学生野球界の動向を中心に—」『国学院大学研究開発推進センター研究紀要』第 9 号、2015 年が詳しい。
- 31) 『読売新聞』1926 年 10 月 24 日付。
- 32) 宮内庁編『昭和天皇実録』第四（東京書籍、2015 年）の 1926 年 10 月 23 日条、『東京朝日新聞』1926 年 10 月 24 日付。
- 33) 『東京朝日新聞』1926 年 10 月 24 日付。
- 34) 『東京朝日新聞』1926 年 12 月 13 日付。
- 35) 飛田穂洲編『早稲田大学野球部五十年史』1950 年、p.247。
- 36) 前掲『権力装置としてのスポーツ』p.19、pp.33-41。
- 37) みの字「剣道春秋」『つるぎ』創刊号、慶応義塾体育会剣道部擁護会、1927 年、『つるぎ合本』三田剣友会、1961 年、所収、p.10。
- 38) 『東京朝日新聞』1926 年 10 月 24 日付。
- 39) 『東京朝日新聞』1926 年 10 月 14 日付。
- 40) 1922 年に開催された文部省主催の「運動体育展覧会」では、裕仁が愛用している剣道具や木刀、弓だけでなく、ゴルフ、テニス、デッキゴルフ、卓球、クロッケー、ローンボールズ、メディシンボール、砲丸や投槍その他のスポーツ用具やそれらをプレーする自身の写真なども展示され、台覧テニス試合の映画（日本庭球協会提供）の上映なども行なわれていた（前掲『権力装置としてのスポーツ』pp.65-66）。
- 41) 前掲「スポーツと天皇制の脈絡」p.33。
- 42) 同上、pp.33-34。
- 43) 宮内省監修『昭和天覧試合』大日本雄辯会講談社、1930 年、pp.298-353。
- 44) 前掲『権力装置としてのスポーツ』pp.104-105。
- 45) 同上 pp.106-108。
- 46) 水上龍太郎「天覧野球試合陪観之記」『三田文学』1929 年 12 月号、鶴見俊輔・中川六平編『天皇百話』上の巻、筑摩書房、1989 年、所収、pp.222-232。

- 47) 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』名古屋大学出版会、2005年、pp.528-529。
- 48) 『週刊文春』編集部「天皇の庶民体験」『週刊文春』1975年10月9日号、猪瀬直樹監修『昭和天皇（目撃者が語る昭和史第一巻）』新人物往来社、1989年、所収、p.260。
- 49) 以下、すべて静中静高百年史編纂委員会編『静中静高百年史』下巻、静岡県立静岡高等学校同窓会、1978年、pp.229-233による。
- 50) 引用にあつて漢数字をアラビア数字に置き換えた。
- 51) 優勝の際の市民の熱狂ぶりについては、前掲『権力装置としてのスポーツ』pp.10-11。